講演記録

いじめ問題の原点をふりかえる

国立教育政策研究所　生徒指導・進路指導研究センター
滝　　充

1. はじめに

この基調講演のタイトルは「いじめ問題の原点をふりかえる」ということだが、いじめというものについて、みなさん分かっているようで分かっていない。いじめという言葉は多様な意味合いで使われているので、それぞれに受け取り方が違う。また、若い学生になればなるほど昔の話を知らない。「昔はいじめってこうゆう風に言われていたんだ」というのを知らないために、誤解やすれ違いが起こるのかもしれない。

2. いじめが問題視されてきた理由

そこでまず、いじめが問題視されてきた理由を考えたい。いじめ行為の多くはちょっとした意地悪、ちょっとした否定的態度といったもので、暴力とは違って行為自体の問題性は弱い。暴力というのは、殴る・蹴る、あるいは人を脅す、人に無理矢理何かをさせるなど、その行為自体がいけない。だが、「いじめ」と言われている行為の中の、冷やかし、からかい、仲間はずれにする、無視といったものは、暴力のように行為自体がいけないと言えるのか。

例えば、今忙しそうにしている人がいる。自分たちは仕事が終わった。その後、一緒にご飯を食べに行こうという話になった時、その忙しそうな人を敢えて誘わないで出かけないだろうか。あるいは、友人に彼女が出来たとき、「お前うまいことやったな!」と言わないだろうか。「よかったね」「お前ら仲いいよな」「あなただけいいわよね」などとからかったり冷やかしたりすることは、いじめなのだろうか。つまり、行為自体が問題という訳ではないのである。

昨今、話題になっている体罰。体罰はなぜいけないか。理由は簡単である。殴る、蹴るというのはそれ自体がいけないからである。それを指導のためだから、愛情を込めてやっているから、相手のためを思っているからなどと理由を付けようが、関係ない。行為自体がだめなのである。

たとえば、大津の事件でも、暴力を先生が見ていながら止めていないということが、そもそも問題である。体罰か否か、体罰が悪いかどうか以前に、殴る蹴るした時点でアウトなのである。

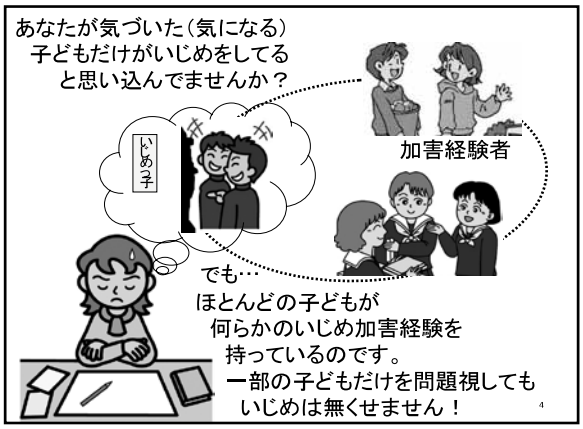
暴力を伴ういじめもあるので紛らわしいが、いじめというものの多く、つまり暴力を伴わないいじめは、行為自体が問題だとはほとんど言えない。ただ、繰り返したり集中したりすると深刻になる。何回も同じことを言い続ける、あるいはしつこくみんなで一斉にその子のことをばかにし続ける、あるいは一斉に無視すると言った場合に初めて問題になる。

悪意を持って精神的に苦痛を感じるようなやり方をするからいじめになる。仮に悪気がなかった場合でも、相手が不快に感じた時点でその行為はいじめや差別になる。いじめは、基本的に相手が精神的に苦痛を感じるかどうかというところで分かれてくるので、場合によってはいじめのつもりではなくても、相手が苦痛を感じた時点でアウトということもあることに注意したい。

ただ、加害者側の多くは、いじめは悪いと分かってやっている。敢えて悪意をもって行っているというところに問題がある。それではどうしたらいいのか。暴力と違い、行為自体の問題性を立証するのは難しい。しかも暴力と違って誰でも加害者になり得るだけに厄介である。

3. 教師の先入観

教師の多くは、自分が気が付いている、気にかかっている子だけがいじめをしていると想定しがちである。しかし、ほとんどの子どもたちは過去にいじめの加害経験を持っていると考えるべきである。これをイメージできないと大きな間違いを犯すことになる。



学校の先生方は、問題のある子どもを発見したいと思うようである。しかし発見する必要は全くない。根本的に発想を変えないと指導できないということが、この後の議論からお分かり頂けるはずである。

４．1996 年の緊急アピールとその意味

「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる。」これは、1996 年に世界に先駆けて日本の文部科学省が真実を訴えた非常に大切なアピールである。

しかし、この内容について本当に分かっているかどうかが問題である。被害者については、誰もがそうした認識を持てる。「誰もが被害者になるんだ」という話に対して、保護者も賛成する。しかしそれと同じくらい、皆が加害経験も持っている。「うちの子どもは被害者なんだ」と言われる方が多くいるが、必ず加害者にもなっていると思わなければならないことを理解してもらいたい。

そして、同じような頻度で起きていても、子どもは大きく入れ替わる。つまり、いわゆる固定的ないじめっ子、いじめられっ子がいると思ったら大きな間違いだということである。

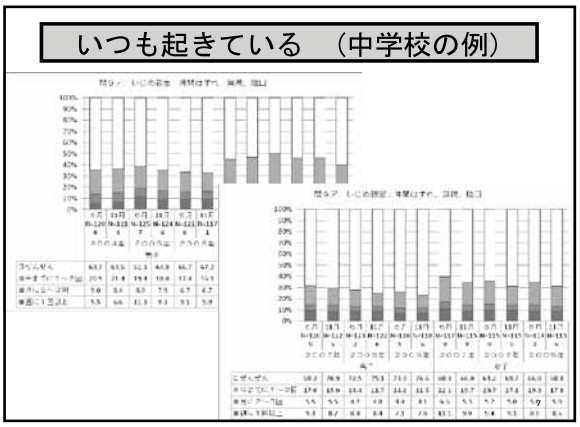
よく話す例だが、ジャイアンはいじめっ子でのび太がいじめられっ子かというと、そうではなくて、例えばしずかちゃんがいじめっ子だったりするわけである。実は、ドラえもんは巧みにわざとのび太に失敗させるよう仕向けており、戦略的ないじめをしているのかもしれない。そんなふうに疑わざるをえないような状況に我々は立たされているのである。

５．いつも起きている（中学校の例）

まず、いじめはどのくらい発生しているのか。

いじめで最も一般的だと言われるのは仲間はずれ、無視、陰口である。これについて、見ていきたい。

まず男子に関して、２００４年から２００６年までの、年に２回ずつの調査の被害経験率を示すと、おおむね３割くらいである。次に女子。仲間はずれに関しては男子よりも女子の方が多く４割程度。３年間の推移を見てもそれほど増減がないことがわかる。同じようにして、２００７年から２００９年の男女の被害経験の結果のグラフを見ても、大きくは変わらないことがわかる。

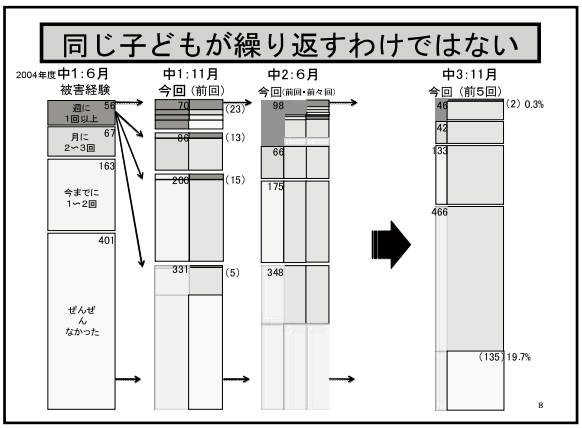


さて、男女平均すると少なくとも３割の子どもたちがいじめの被害に遭っている。このときに皆さんは「いじめられっ子が３割くらいいるのだな」と想像しがちである。しかし、それは根本的に間違っている。まず、この３割が同じ子どもと思いがちだが、そうではない。そもそも毎年度、生徒全体は３分の１ずつ入れ替わる。

そうすると、毎学年、必ず３割ずつ問題児がいるのでは、と思うかもしれない。しかし、実は次に示す図のように被害者が入れ替わっていっているのである。

６．同じ子どもが繰り返すわけではない

次の図は、2004 年度の中１のデータである。６月時点では、週に１回以上いじめをされていた者が５６名、月に２～３回が６７名、１６３名が今までに１、２回、４０１名が全然なかったと答えている。



それが１２月時点、同じ学年でクラス替えをしていない時になると、週に１回以上いじめをされていた者が７０名になる。５６名から７０名、何人増えたでしょうかと小学校の算数なら尋ねるだろう。１４というのが正解のはずだが、これを正解と思い込む事自体、根本的に間違っている。

みなさんは勝手に最初の５６名は変わらないままで、そこにプラス１４名になると思い込んでいる。これは勝手にそう思い込んでいるだけで、事実は全く違うことを知る必要がある。

まずこの５６名の中で、前回に引き続き週に１回以上いじめられていたというのは２３名。だから、７０－２３＝４７名は前回からのメンバーではないということである。

では、前回いじめられていた者はどこへいったのだろうか。それは、被害の頻度が下がったり、まったくいじめられなくなったりしたのである。その代わりに、月に２～３回とか、今までに１～２回、あるいはいじめにあっていなかった子どもたちが、新たに週に１回以上の被害者になった。

さて、さらに学年が上がると、また被害者の数が増える。しかし、その前から週に１回以上の被害にあっていた子は３分の１であって、３分の２は継続していない。しかし、その代わり１回目に被害にあっていて、２回目にはあっていなかった子どもの中で復活する子も出てきたりする。

そのようにして、３年間の６回分を同じように見ていくと、実は６回とも週に１回以上いじめられていると答えた子は２名だけで全体の０．３％に過ぎない。みなさんが「うちのクラスでいじめられそうな子がいる」と思うとき、２－３名程度を思い浮かべると思うのだが、それは多過ぎということになる。５００人くらいの学校に１～２名という数字。だから、学年に一人いるかどうかという話である。

そして、もう一つ気をつけてほしいのは、全然いじめられなかったという子どものほうである。全然いじめられなかったという子どもは３年間の間に２割しかいない。８割はどこかでなにかを言われたりしたことがある。自分もしたことがあるのかもしれないが、１回くらいは必ず言われたことがある、というのが今の子どもたちなのである。

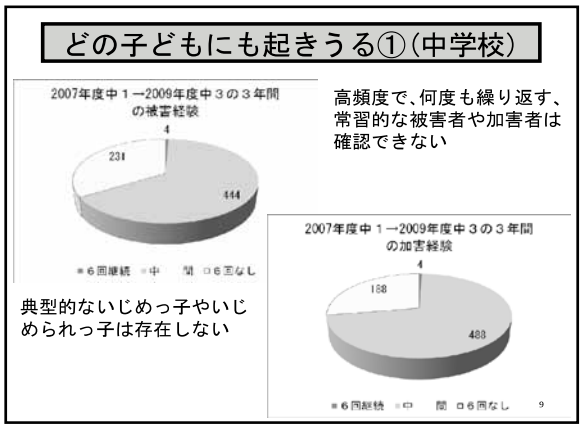
大津の事件のような、殴る、蹴るを伴う行為をいじめだと思っていると、どの子にも起こりうるなんて到底信じられないであろう。しかし、実際に、仲間はずれのようないじめはどの子どもにも起こりうる。しかも、大津のような殴る蹴るをされたから自殺をした子どもと、仲間はずれにされて自殺をした子ども、どっちが多いのか。仲間はずれ、無視、陰口による自殺は、同じか、むしろ多いと思って頂きたい。

殴る、蹴るというのは比較的早い段階で止まる。第三者にも見えているからである。殴る蹴るという行為に先生方が気がつきながら、「やめとけや!」みたいなことしか言わなかったという去年の事件のほうが異常事態なのである。しかも、最後まで学校は、「あれはいじめではなかった」と言い張っている。

そこにあるのは、マスコミが言うような隠蔽体質といった問題ではないと思う。事件後の対応時はともかく、その前の段階で隠蔽しようと思って隠蔽できるほど学校はしっかりした組織ではない。一部の声の大きな先生が「あれは問題じゃない」、「あれはおれが指導しとくから」と言ってしまうとそれでうやむやになってしまう。そういったことが、どの学校にもある。その結果、「いじめではない」という主張がまかり通り、学校としては後手に回ってしまったと考えられる。

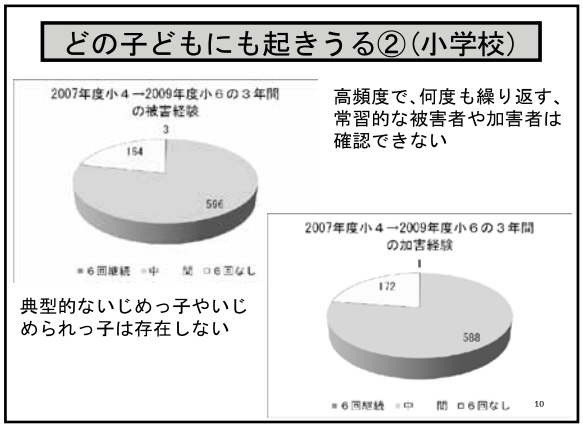
７．どの子どもにも起きうる（３年間）

２００４～２００６年の３年間の被害経験の推移を見てきたが、もっと新しい２００７～２００９年の３年間で見ていこう。



中学校の場合、週に１回以上のいじめを３年間受け続けたのは４人である。中学３年生になると「いじめられている」という子どもは多少減るが、それでも３年間ともまったくいじめられなかったのは２割５分くらいである。

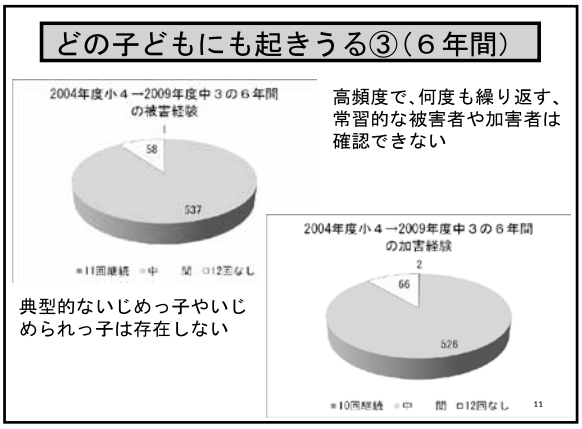
むしろ、こちらのほうに驚いて頂きたいのだが、被害者と加害者の数は、グラフに見出しがなければどちらがどちらか分からない。中学生は、被害経験と同じような割合で加害の経験もしているのである。



それでは、小学校ではどうだろうか。小学校でも似たような割合を示している。被害に遭っていない子どもは２割以下。また、本当にどの子どもたちもいじめ加害をやっている。従って、被害者でしかないという子どもたちはほとんどいない。

８．どの子どもにも起きうる③（年間）

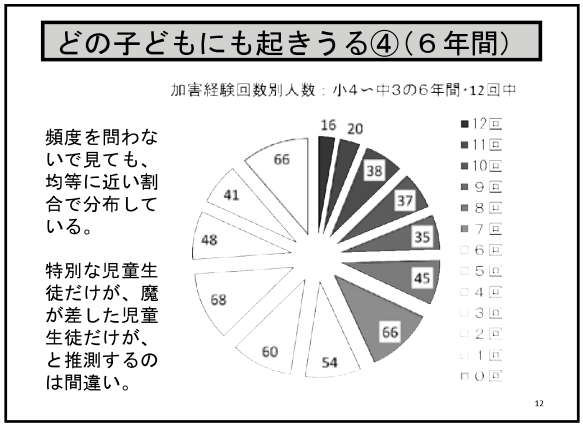
同じようにして小学校４年生から中学校３年生までの６年間を見てみると、そのことはもっとよくわかる。６年間で考えていくと、いじめに）関わっていないという子どもは１割しかいい。６年間の被害経験も加害経験も、９割の子どもが関わっているのであるである



さて、ここまでの分析では、「週に１回以上」に着目して見てきた。週に１回以上に限定した理由は、いわゆる「いじめられっ子」「いじめっ子」と言われる子どもなのだから、頻繁にいじめられていたり、いじめていたりしなければならないという前提で集計したからである。

しかし、だからと言って、しょっちゅうではなく、週に１回の事もあれば月に２－３回のこともあるのではないかという素朴な疑問も湧いてくる。それでは、そのような集計をしてみるとどうなるのか。ここでは加害経験を見ていく。この後の議論で問題視していきたいのは加害経験だからである。

さて、みなさんの予想はどの辺りだろうか。週に１回に限定しなければ２－３割は出てくるのではないだろうかとか、なんとなくクラスに２－３人くらいは出てくるのではないだろうかとか、あるいは「誘われちゃったからついしちゃったよ」という、１～２回程度の魔が差した子どもが多いのではないだろうか、などといろいろ予想ができよう。では、実際にどうなるのかを示したのが次の図である。



６年間であるから全部で１２回調査している。よって、１２回中１２回が最大になる。図を見ていくと、１２、

１１、１０、９、８、７、６回…。ここまでの子どもは、平均すると年１回以上はいじめをやっていたことになる。場合によっては、小学校のときはあまりやっていなかったが中学校では毎回やっていたということかも知れない。いずれにしても、ここまでで４５％である。

続いて、５、４、３、２、１回。この１回の子どもは「魔が差した」と言ってもいいのかもしれない。つい友だちに誘われたなど。あるいは２回目くらいまでは「魔が差した」に入れてあげてもよいのかもしれない。結局、全然したことがない者と魔が差した者を合わせて２５％としても、７５％は言い逃れはできないであろう。

さて、このようにほぼ全員がいじめをしている。ほぼ全員がしているわけだから、いじめの加害者を発見する必要はない。「いじめをしそうな子やいかにもされそうな子を守りましょう」などという発想は、全く意味がないということを、しっかりと理解して頂きたい。

９．他の問題行動等とは、大きく異なる

単にどの子どもにも起きうるというだけではなく、その発生の割合も桁違いということが問題なのである。

たとえば、「誰だって交通事故に遭う可能性がある」と言った時の確率というのは１万分の１とか１０万分の１とか１００万分の１のことであろう。そんな低い確率なら、全員に起こりうるという話をしてもさほど意味はない。

ところが、いじめの場合にどの子どもにも起きうるという場合の割合は、桁違いに多い。５００人規模の学校で考えると、暴力は通年で２．８名、不登校は１２．９名。いじめの場合の被害も加害も半期で２２５名程度となる。かなりの割合で、いつ被害者・加害者になるか分からないことがわかる。桁外れ、桁違い、という言葉を私たちは何気なく使っているが、桁が違うというのは、このようなことを言うのである。いじめは、文字通り桁外れに多い問題行動なのである。

従って、暴力といじめの話を混同してもらっては困る。生徒指導関係の先生は暴力の関係で腕を鳴らした先生が多いので、問題のある子どもをいかに早くからマークするかという考え方をしがちである。しかし、これは実態にはそぐわない。ここに示してきたくらい頻繁に起きているのに一人一人をマークするという発想をすること自体、理解しがたい。

かなりの割合でいつ被害者、加害者になるかわからない。従って、全員を対象にした取り組みが不可欠なのである。ところが、先生方はまず誰が被害者なのか、誰が加害者なのかがわからないと対応できないとおっしゃる。しかし、それはおかしい。

例えば、インフルエンザの対策といったとき、「自分のクラスで一番かかりそうな子をマークしよう」と考えるだろうか。あるいは、「あの子は鼻水が出ていたから危ないかもしれない」、「良く様子をみておこう」、「あの子どもは普段から叩いても死なないような子だからインフルエンザの心配はない」などと言うだろうか。

いじめやインフルエンザのように頻繁に起こるものに対して我々はどうするか。「全員を対象にしてうがい手洗いを徹底させましょう」、あるいは「体に異常がないのであれば、全員がワクチンの接種をしましょう」などといった取組をするのではないか。

つまり、それと同じように全員を対象とした対策を取らなければいけない事柄が起きているにもかかわらず、暴力のときと同じような発想で、被害にあいそうな子どもとか、加害者になりそうな子どもを探したがる。探せないと対応できないと言い訳をする。実にくだらない。

皆がこれだけ被害者になったり加害者になったりするということは、皆が加害者にならなければ被害者もいなくなるということになる。いじめ対策とは、全員が加害者にならないようにするだけのことなのである。

１０．従来の議論について言えること①

ここまで確認してきた実態から言えることについて、ひとまず整理しておこう。

みなさん勉強熱心で海外の本などを読まれたりするかもしれない。しかし、欧米の研究はほとんど意味がない。なぜ意味がないか。１回しかアンケート調査をしていないからである。

典型的な研究スタイルは、１回アンケートをして、加害経験がある者を加害者、被害経験がある者を被害者、両方あるものを加害被害者とし、残りは未経験者とする。そして、この４つのパターンごとに集計して違いがある項目を探す。そこから何が原因かを推測する。そして、「親の養育態度が原因」、「もともと暴力的な子がいじめをする」などと言ってきた。

ところが、実際に海外の研究者と共同で追跡調査をしてみると、日本と同じ結果が得られる。つまり、被害者や加害者は入れ替わるのである。入れ替わるということは、ある調査時点でたまたま加害者だったり被害者だっ

たりした者が示した特徴をいくら分析しても意味が無い。

１１．従来の議論について言えること②

もう一つ、今年度流行ったのは記名式のアンケートや心理検査である。いじめ対策のために何をやるかと言ったときに、「とにかく被害者を発見しなければいけない」ということで、大流行になった。

実に馬鹿げている。そもそもいじめっていうのは人に相談しないということが、暗黙の了解のはずではないか。なのに、記名式のアンケートや心理検査が使えると思っていること自体が不思議である。

さらに、仮に素直に回答してくる子どもばかりで、先生のことを信頼し、先生助けてくださいと書いてくると仮定したとしても、実施後に起きたり悪化したりした事例までは含まれてこないことくらい、想像すべきである。

現実に起きた話を紹介しよう。昨年、鳥取県のある中学校で、５月に心理検査をやった。それはいじめを発見できるという触れ込みの心理検査なのだが、１０月に自殺未遂が起きた。そもそも、記名式の心理検査で発見できるということ自体が疑わしいのだが、５月の検査でノーマークだったらそれ以降もいじめられないと思い込んでいるところが愚かである。

にもかかわらず、昨年の大騒ぎがあってから、いじめ対策と称して一生懸命心理検査をやるようになった学校や教育委員会が増えている。いじめというものの実態や特徴をまったく知りもしないまま、「発見率９５％」という触れ込みにだまされて飛びついている。困った話である。

１２．いじめた理由と原因

ところで、学校などのアンケートを見ると、いじめた理由を加害者に尋ねていたりする。しかし、それはほとんど意味がない。いじめというのはもともと自分の行為を正当化しつつ行う行為だからである。

加害側は、「だってあいつがむかつくんだもん」、「だってあいつが先に手を出してきたんだもん」などという理由を並べる。しかし、それは自分がしたことに対して「だからやっても当然なんだ」、「やっても仕方がないんだ」という言い訳なのである。この辺りが暴力といじめの違いである。

暴力を振るう人間は、暴力自体がだめだと分かっている。分かった上で殴っているから、その意味では潔い。「なんで殴ったんだ?」「殴りたかったら」という話で、「殴ったらいけないことくらいわかってるだろう?」と言うと、「分かってる」といった話になる。

ところが、いじめの場合、「僕はしてません」とか「僕は○○君がリレーでバトンを落として負けたから、○○君があのときバトンを落とさなかったらよかったのにと△△君が言った時、そうだそうだと言っただけ」、「僕はいじめたわけではなくて、ただ○○君がバトンを落としたっていう事実を言っただけです」などと言う。

あるいは、「□□さんの色が黒いから黒い黒いと言っただけです。本当のことを言っちゃいけないんですか」という具合で、必ず言い訳や正当化できる理屈を持って行っている。だから、加害者に理由を聞いてどうする、いう話なのである。

しかし、欧米の研究の中では、いじめの理由として、「あの子が眼鏡をかけていたから」や「髪の毛が赤かったから」など、そのようなことをまじめに言う研究者がいる。「子どもに聞けばいい」、「子どもに聞けば本当のことが分かる」という単純な話にはならない。

１３．なぜ、いじめるのか

では、なぜ大半の子どもが、いわゆる普通の子どもまでが、いじめを行うのだろうか。

一つには、人間の本能のような部分があると考えられる。自分の力を行使すること、誇示することを快感と思う部分は、我々誰でも持っている。

自宅にペットのシマリスがいるが、近所の子どもが「餌をあげていい?」と聞くので、「いいよ」と言うと餌を与えはじめる。最初は普通にやっているのだが、そのうち餌をあちこち動かしてシマリスを右往左往させようとする。

人間はそのようなことをしたがるものなのだ。つまり、弱い相手を自分の思い通りにコントロールしたがる。たいして悪意はなくとも、人間は生まれつき意地悪なところがある。「趣味が悪い」としか思えないが、そのまま成長するといじめを平気で行うようになると私は想像しているのである。

また、暴力を振るうわけではないが、ストレスが溜まっていたりすると、他人がいじめているのに同調したりする。深夜の満員電車に乗っていて、たまたまどこかで酔っ払いに足を踏まれたりした時、「いてーな!ばかやろう!」などと言う人がいる。大人気ないと思うのだが。やはり

ストレスが溜まっていたりすると、ついそのように人にぶつけて発散してしまう。これもいじめの原因になりうる。

しかし、いじめということに特化していうと、次のような説明が一番いいのかもしれない。それは低い自己評価を回復するために、他者をいじめる、というものである。

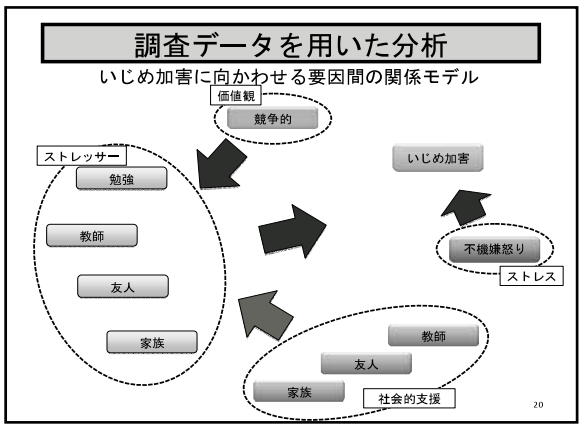
自己評価が低いということは、子どもにとって大きなストレスと言える。先生が「あんたってダメだね」とか「どうしてあなたっていつもそんなことするの」とか、お母さんやお父さんから「あなた、お姉ちゃんと比べてダメね」とか言われたりすると、自分のプライドが傷つく。それを解消するためにどうするかというと、小さい子を叩いたり蹴ったりする場合もあるが、誰かをいじめることも少なくない。

子どもの言葉を聞いていて面白いなと思うのは、友だちに向かって悪口を言う子どもは、ほとんど親の口まねだということである。「あんたお兄ちゃんに比べるとだめね」とか「あんたってのろまね」と親から言われている子どもが、学校で自分より弱そうな子どもがいると「お前って本当にのろまだよな」と言う。そうすることで多少気持ちが楽になる。「自分より下の子がいるじゃん」と思えるからである。

ねたみ、嫉妬もそうである。例えば、「なんでお前そんなにいじめるんだ?」と聞くと「だって、あいつ私の彼氏とったんだもん」と言った話になる。私の彼氏を取られたんなら、彼氏に手をあげればいい、彼氏を恨めばいいのに、たいてい彼氏を奪った相手をねたむ、嫉妬する。なぜかというと、「向こうを選んだ」＝「私の方が向こうより下だった」ということに傷ついているからである。そうなると、傷ついている部分をなんとかするために、相手をなんとかして貶めよう、足を引っ張ってやろうということになったりする。

１４．調査データを用いた分析

そうした話をデータで押さえていく。この図にある「競争的な価値観」とは、人に負けたくない、負け組になりたくない、勝ち組になりたいというもの。それから「不機嫌怒りストレス」、これはいらいらや怒りで、いじめの加害要因ともなる。それから、「ストレッサー」。



日本ではストレスとストレッサーはあまり区別されないが、ストレスというのは一種の状態、いらいらしたり、やる気がなくなったりという状態。そのストレスをもたらすものが、「勉強」、「教師」、「友人」、「家族」といった「ストレッサー」。勉強のことで何かトラブルがあった、例えばテストの点数が悪かったということや、いつもはクラスで１、２番なのに、今日はそうではなくて５番だったなど。あるいは、先生から当てられて答えられず、「お前こんなのも解けないのか?」と言われた。友だちから「お前最近太ったね」と言われた。あるいは、家族から「あなた、もう少しお兄ちゃんを見習って欲しいわね」と言われたなど。そのような出来事があったかどうかというのが「ストレッサー」。

そして、「社会的支援」は、教師との信頼関係があるとか、友人との信頼関係があるとか、家族との信頼関係が出来ているということ。

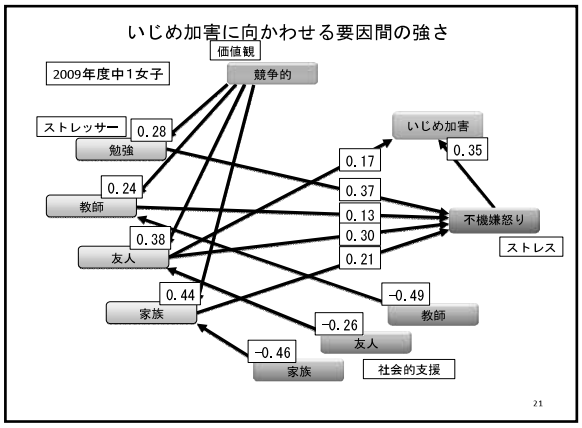
「負けたくない」という「競争的価値観」が強いと、同じできごとでもより強く不満を感じる。８０点のテストが返ってきた時、事実は８０点。しかし、「競争的価値観」の有無によって、「８０点しか取れなかった」とか「８０点も取れた」となる。「８０点しか取れなかった」となれば、それはストレッサーになる。このような「競争的価値観」があると、人に負けたくない、人に勝つ事が楽しいといった気持ちが強いと、このような状況になりやすい。

一方、例えば、先生に理由もなく叱られたとき、先生との関係がいいか悪いかが関わってくる。先生がいきなり「お前ら、なにやっているんだ」と叱ったとする。信頼関係がなければ「理由もわからず叱られた」と思うだろうし、信頼関係ある教師から叱られたならば、「あれ、俺たちなにかまずいことしたかな?」、「ちょっと先生に謝

りにいこうか」となり、ストレッサーにならない。

１５．いじめ加害に向かわせる要因間の強さ

実際にこのモデルに沿って計算してみると、次のような強さで影響を与えていることがわかる。

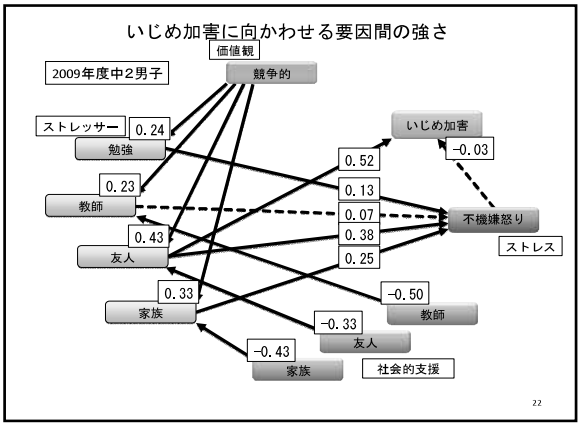


「競争的価値観」は、家族からのストレスを高める。例えば、お兄さんに比べられてプレッシャーを感じていれば、「競争的価値観」がそれを強める。友人との関係で言うと、「友たちに負けたくない」という思いがあると、「友人ストレッサー」を強めたりする。

一方、それを緩和させるのが「社会的支援」からの矢印になる。「競争的価値観」で高められたものを減らすように働く。実際、そのようにプラスマイナスが相殺された中で、「不機嫌怒りストレス」へと集中していく。「友人ストレッサー」からそのまま「いじめ加害」にも直接に向かっているが、さほど強くはない。

いろいろな出来事がこのように「不機嫌怒りストレス」として集約され、最後に「いじめ加害」に向かっていくという関係が描き出されている。ストレスというと、単純に受験ストレスなどといった見方をしがちだが、様々な人間関係上の、対家族やあるいは対教師、対勉強という中でも、もたらされてくる。先ほどいじめの背景にはストレスがあると言ったが、このストレスにはそうした様々なものが含まれているということである。

では、この構図が全てのいじめに当てはまるかというと、そうではない。ほとんど同じなのだが。「教師ストレッサー」や「不機嫌怒りストレス」が強くなくても、「友人ストレッサー」から「いじめ加害」に直接に向かうこともある。男子であれば必ずこのパターンということではなく、男子であれ女子であれ、中１であれ中２であれ、このような場合もある。



１６．分析結果を踏まえて考えると・・・

このような分析を繰り返した結果、導き出されてきた結論を紹介しておこう。

まず、学校はストレスをいたずらに煽る場所であってはいけない。教師の日々の関わり方や働きかけ方の見直しによって、ストレスやストレッサーを緩和するような工夫や配慮が必要になる。

先生方の中には、「お前ら、２組だけには負けるなよ」とか「今度の合唱コンクール１位じゃなかったらお前ら、見捨てるからな」といったことを平気で言う方がいらっしゃる。そのようにしてプレッシャーをかけながら学級経営する先生のクラスでは、いじめが起きやすい。どちらかというと、先生がゆるい感じの学級経営をしているクラスでは、いじめがなかったという例もある。

また、ストレスがあるから、ストレッサーがあるからといって、他者を攻撃して平気というのはまずい。なぜそのようになってしまうのか。自分は認められているとか、この人の役に立っていると感じていて、集団や社会とのつながりを自覚している子どもたちの方が、我慢強い。お互い様だと思ったりも出来る。

「同じクラスの仲間なんだからそんな風に言うなよな」という思いを持てるということは、やはりそのクラス（学年・学校）の中にいて、自分自身が居心地がいいから。居心地がいいっていうのは、子どもたちが好き勝手できるということではなくて、そこのクラスにみんなでいることに違和感がない、疎外感がないという感じ。なんとなくうまくいっていると感じられていることが大切なのである。

１７．発想を変えて、いじめが減った

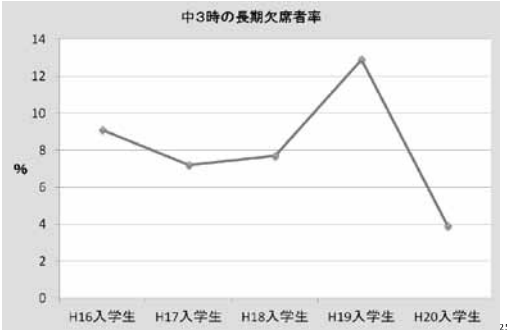
ここに「発想を変える」とある。実際にいじめを減らすためにどうしたのか。

いじめはいけないということを子どもに教えていないからいじめが起きるという考え方をする人がいるが、そんなことはない。いじめはいけないなんていうことは、教えられなくてもわかっている。わかっているがしてしまうというのがむしろ正しい。

もちろん、小学校１年生には「いじめはだめだよ」、「相手がいやがっているでしょ」と教えなければならないかもしれない。しかし、そのようないじめ対策でいじめがなくなるということは期待できない。そうではなく、大きく発想を変える必要がある。

例えば、こんな中学校がある。平成１６年の新入生が３年後に卒業する時、１０％近い不登校がいる。１９年の入学生なんか、ほとんど１３％である。１３％と言うと、ほぼ６分の１。６分の１、７分の１とはどのようなことかと言うと、クラスの班の中の一人がいないという計算になる。そのくらいの異常事態が起きる大変な学校だった。

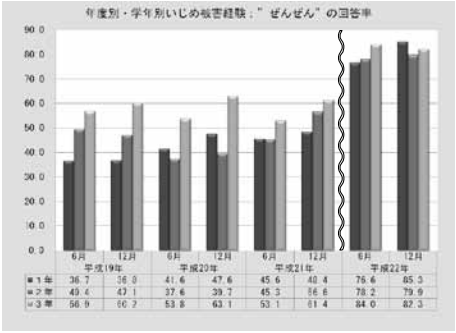
発想を変えて、不登校が減った



25

いじめについて見てみよう。平成１９年から２２年にかけて、６月と１２月の２回ずつの調査である。１９年の６月は、「まったくいじめの被害にあったことがない」と答えた子どもは、１年生では４割、３年生だと６割に近く、２年生ではその中間くらいである。

発想を変えて、いじめが減った①



26

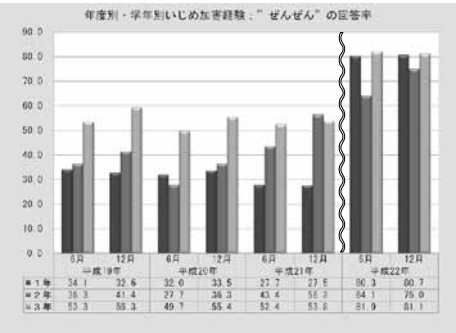
半年後、大きな差はない。それほど大きくは変わらない。１年後、２年後と見ていくが、なかなか変わらない。いつ見てもやはり３年生が一番いじめられてないが、それでもかなり多い。

そして、平成２２年、「いじめられていない」という割合が急増する。そこに波線が引いてある理由は、ここで極端に変わったということもあるが、２１年までは「週１回いじめられた」、「月に１回いじめられた」などと質問をしていた。それに対して、２２年は「よくあった」、「たまにあった」、「あまりなかった」、「まったくなかった」と尋ねている。

つまり、質問が違うので線を引いているわけだが、「全くなかった」という回答を示しているので、同じものとして比較できる。しかし念のためにここに線を引いた。そして、ここでは、「いじめられなかった」回答が増えたということを言いたいというよりも、１年生と３年生に差がないこと、１年生が逆転していたりもすることがポイントなのである。

次に加害経験を見る。被害者が減るのであれば、当然、加害者も減る。より正確に言うと、加害者がいないのだから、被害者は減る。では、この時に何をしたのか。

発想を変えて、いじめが減った②



27

１８．いじめ・不登校の減少の背景に

実は、この中学校区には２つ小学校があるのだが、校区内のすべての小学校６年生が小学校１年生のお世話活動に取り組んだ。小学校・中学校でしょっちゅう言われていたのが、自分に自信が無い子が多いということ。「おれなんかどうせだめだもん」というようなことを言っている子どもがすごく多いということであった。

そこで、そうした自信、自己有用感を育てるために小学校から取り組みましょうということになり、６年生にお世話活動をさせることにした。そうすると何が変わったか。小学校６年生の長期欠席が４－５％という普通ではありえないくらい高い数字だったものが、１％未満に減った。中学校で不登校が減ったのも当然である。このように、子どもたちがお世話活動で自信をつけたというのが１つ目。

もう１つ。もともと大変な学校だったので、授業のことはできなくてもいいから、生活面だけやろうと言っていた。しかし、そうではなく授業もきちんと取り組もうという形に切り変わった。

いじめに対して生徒会がメッセージを作っただとか、生徒会活動に参加しただとか、いじめポスターに取り組んだとかそんなことはしていない。特別な道徳教育もやってない、あるいは心理検査で一生懸命に被害にあいそうな子どもを捜すようなことも一切していない。要するに、いじめに特化した取組は何もしていない。それでは何をしたのか。子どもたちに生活面、勉強の面で自信をつけさせるようなことをしたのみである。

１９．いじめは個別対応型の問題ではない

いじめはどの子どもに起きても不思議ではない、これは事実として確認できることである。乱暴な子どもはいじめをすると言って、つい乱暴な子どもばかりに目がいくが、どの子もするのであるから、乱暴な子だってするのである。要は、先生たちは乱暴な子どもばかりに目がいき、そうではない子どももいじめをしているのに、そうでは無い子どもは何もしていないかのように、見逃し、見落としをする。

しかも、そうした多くの子どもがやっている行為はたいしたことではない。それを全部大人が監視していくのは不可能である。それではどうするのか。問題は些細なことが深刻なものへとエスカレートしてしまうことである。

例えば、今みたいな時期にたばこの投げ捨てをすると山火事になったりする。しかし、梅雨の時期は山火事にならない。たばこのポイ捨てはいいことではない。しかし、些細なことである。タバコのポイ捨てをしたらつねに家が一軒燃えてしまうというのなら誰もポイ捨てをしないと思う。しかし、ポイ捨てする場所がガソリンスタンドだとすると怖い。

要するに、ガソリンスタンド状態になっている、あるいは、今の時期のような山の状態になっているのを解決していく方が、常に生じている些細なトラブルを減らすことよりもよっぽど早い。子どもたちは必ずトラブルを起こすからだ。

たとえば、掃除をやっている。たまたまバケツで水を持ってくる。よける。水がかかる。「なにすんだばかやろう!」となる。ここで「なにすんだよ!」「あ、ごめんね!」「気をつけろよな」で済む学級と、「なにすんだ、ばかやろう」「あーごめん!」「ごめんじゃねーよ、またおまえかよ」というクラス。

これから先、何を教えていくのがよいのか。バケツの水をこぼさないようにしましょう、そうした些細なトラブルを減らすようにしましょうと指導するのか。私は、些細なトラブルが燃え広がらないように指導することこそが大切なのではないかと考えている。

２０．いじめは早期発見型の問題ではない

具体的に何をするかというと、まずは気づいたときの早期対応。この早期というのは気がついた時に速やかにという意味の早期である。それとともに、回り道のように見えても「未然防止」に取り組むしかない。この「未然防止」は「早期発見」とは異なることに注意して欲しい。そのさらに前段階のことである。

それでは「未然防止」って何をするかというと、環境面の改善と児童生徒の社会性の育成が鍵になる。標語を二つ作った。不登校の場合と全く同じ表現を用いている。

① 居場所づくり

まずは、ささいな行為が、深刻ないじめへと燃え広がってしまわないような居場所づくり。居場所づくりとは一体なにかというと、どの児童生徒も落ち着ける場所を授業や行事の中で作り出すということ。例えば、授業中に子どもが不安を感じたり、いらいらしなければいけないような状況がある。

中学校であれば、授業中ついていけない子どもがうつぶせになって寝ている。うつぶせになって寝ているって、きっとつらい。５０分間眠くないのに伏せてなればいけない。そして、５０分が終わり、その次の１０分で発散させる。そんな繰り返しで子どもは持たないはずである。あるいは、おとなしい生徒などが、当てられたら「わからない」からと、先生から目をそらすという学級ではなく、どの子どもたちも不安感がなく落ち着けるように、もっと基礎的な勉強を手がけていかなければだめなのではないか。

そうした子どもたちがきちんと授業を受けられているか、基礎学力がちゃんとついているか、授業に参加しているという雰囲気が出来ているか。そういったことを考えていくことが、居場所づくりなのである。

② 絆づくり

同時に、ただおびえている子さえいなければよいというにとどまらず、「いじめなんかくだらないよな」と思えるためには何が必要かと考えると、認めてもらっているという感覚がすごく重要ということである。自分はそこにいていいと同時に、その中で自分は認めてもらっているという感覚が大切である。

授業の場面では最近学び合いが大事だとよく言われる。ペアやグループで相談することを学び合いと言ったりするようだが、実はそのグループの中でもさらに参加してない子もいる。例えば、いい考えを持っているが、なかなか自分で手を挙げて発表できない。そのような時、ペア学習、グループ学習に意味がある。そうした子の意見が反映できるようにするためである。

しかしそうは言っても、やはりなかなか手をあげて自分で意見を言えない子どももいる。

このようなやり方はどうか。

- 自分の意見を考えてごらん、と言う。（２分くらい）
- ２分あげるから、お隣の人とお互いに今どんなことを書いたか見せ合って、意見を交換してごらん、と言う。
- お友だちと見せ合ったものをみて、となりの人の意見がいい意見だと思った人は紹介してあげてくれませんか、と言う。

そうすると組み合わせが大事になる。いいことを言うのだが自信が無い子と、他人の良さが分かって自分で手を挙げて言える子を組み合わせると、代わりにその子が手をあげてくれる、「私は今この人の意見を聞いてすごいなと思った」という具合である。自分で手を挙げることが望ましいが、こうした取組をすることによって、手を挙げなくてもクラスに認められる感覚を得られる。

例えば、このような工夫を授業や行事のなかでどんどん取り入れていくことによって、認めてもらうということに関しても見通しが出てくる。やんちゃな子どもたちも認めてもらう中で、落ち着きが出てくることになる。こうした取組で確かにいじめというものは減っていくと思う。ただ思っているというだけではなく、先ほどお見せしたように、現に減るのである。

従って、いじめを減らすために、いじめに対して特化した対応をするのは効果がないと、私は思っている。なぜかというと、いじめは他の問題行動とは異なり、誰もが巻き込まれていくインフルエンザのようなものである。従来からの対策の仕方を根本的に変えないと仕方がないのである。

（文責　教育学研究科２年　川平英里）